HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	サーキットモデルによるNPO活動のための知識インプット評価システム
Author(s)	平澤, 光; 敷田, 麻実
Description	日本NPO学会第7回年次大会. 平成17年3月20日～平成17年3月21日. 西宮市
Relation	日本NPO学会第7回年次大会報告概要集. pp.161-162
Issue Date	2005-03-21
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34800
Type	conference paper
File Information	1396.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

■サーキットモデルによるNPO活動のための知識インプット評価システム

平澤　光(塚田理研工業株式会社)
敷田　麻実(金沢工業大学)

1. はじめに

本研究は、サーキットモデル(敷田・森重2003ほか)の理論を応用し、NPOに適用可能なナレッジマネジメントシステム(以下：本システム)を開発するため、NPO同様に非営利な活動に本システムを適用し、その有効性を検証し、今後の可能性を示した。

2. NPOのマネジメントの必要性

法人格を取得しているNPOはおよそ20,000団体存在し(内閣府HPから)、連続して増加している。NPOは、1995年の阪神淡路大震災、また最近では2004年の新潟県中越地震（または新潟県中越大震災）でも多分野で活躍し、社会的にも重要性が認められてきた。一方で「知識社会」の到来の中、資源の中でもノウハウや運営のコツなどの「知識」は重要さを増し、それらは特に「知識資産」とも呼ばれている(野中・紺野2002)。このような背景の中で、NPOにおいても企業同様に知識資産の管理の必要性があり（井田・梅本、2003)、また外部から知識を取り込み活動資源とすることが重要であり(河口2002)、さらに知識資産を評価できるシステムも必要とされている(遠山2003)。

3. サーキットモデルと本システムについて

本システムはサーキットモデルの理論を応用して開発されたシステムであり、知識の獲得～学習～知識の蓄積までのインプット活動について評価できる。サーキットモデルの詳細やNPO活動への適用とその有効性については、先行研究（敷田・森重、2003 などを参照)が既に出ている。本システムは、活動中にインプットした知識の量を、資産的知識と負債的知識に分類し、要約文書の数でカウントし、それぞれの文書の中身に応じて決められる満足度係数を掛けることで数値化・重み付けを行う。さらに数値を元にグラフ化を行い、インプット量や相対バランスを可視化し、次のインプット活動の示唆を得ようとする。なお、本論文において「負債的知識」とは「外部から仕入れた知識」を意味し、「資産的知識」とは「借り入れた知識を元手に創造された新たな知識（成果)」を意味する。

4. システムの有効性の検証方法

本システムの有効性を検証するため、実際に行われたプロジェクト活動である『片野鴨池周辺地域に関する資料データベースの作成(平澤2003)』への適用を行った(以下：検証プロジェクト)。この検証プロジェクトは非営利であり、大学外部の組織から専門知識などの資源の供給を積極的に受けるという体制をとっていたことから、NPO活動と同様の性質を持つと考え、検証の対象とした。検証プロジェクトで行われていたインプット活動とその量を、プロジェクトの活動週報等から把握し、インプット量を数値化し、さらに可視化を行い、その結果から得られる示唆を整理した。

5. 本システムによるインプット活動の評価結果

評価の結果から明らかになった、検証プロジェクトのインプット活動の特徴を示す。

① プロジェクトに必要な知識資産の大部分をフィールドワーク調査から得ていた。
② フィールドワークで収集した資料の分類や整理統合、資料間の関係解析など、データベースという具体的なアウトプットを創出するためのインプットにも重点が置かれていた。
③ 解析やデータベース構築など資産的知識に関連するインプットよりも、データベースに蓄積するための地域住民の体験談など、つまり負債的知識に関連するインプットに重点が置かれた「知識蓄積型」のプロジェクトであった。

6. 本システムの有効性について

検証プロジェクトへの適用の中から、本システムの有効性が以下のように示された。

①インターミディアリー的な機能

本システムは、知識の連結あるいは創発を助け、新たな知識の創造につなげる中継的な機能を持っている。

②選択的・有機的な知識の蓄積

プロジェクトに有益な知識を、選択的かつ有機的に蓄積するデータベース的構造となっている。

③インタープリンター的な機能

インプット活動で蓄積された知識について、量と相対バランスを可視化することができる。

④次の知識獲得への示唆を得る

たとえば検証プロジェクトの場合「よりデータベースの検索機能を高めるために関連する知識のインプットを増やす必要がある」といった示唆を得ることができる。

7. 結論

NPO 活動の場合、多様なメンバーの存在も考え、知識インプットについてもそのプロセスや評価を共有する仕組みが必要である。さらに組織でインプットを進める場合は、蓄積されるインプット量は検証プロジェクトのような個人レベルのそれと比較して、膨大となることが予想される。今後は NPO への適用をより現実的なものするために、本システムそのもののデータベース化を検討し、組織レベルに適用できる知識共有システムに発展させていく必要がある。

参考文献：

敷田麻実・森重昌之(2003)「公共事業の戦略的活用と地域の環境保全－北海道黒松内町における持続可能な地域振興と政策プロセスの検証－」『公共事業と環境保全(環境経済・政策学会年報第 8 号)』東洋経済新報社、pp.121-138

野中郁次郎・紺野登(2002)『知識経営のすすめ-ナレッジマネジメントとその時代-』ちくま書房、238 p

井田淳・梅本勝博（2003）「NPO のナレッジ・マネジメント 3(1)」pp.37-45

河口弘雄(2002)『NPO の実践経営学』同友館、pp79-92

遠山亮子(2003)「1 知のダイナミクス企業やコミュニティーの変革を促す視座－知識資産－」杉山公造・永田晃也・下嶋篤編『ナレッジサイエンス-知を再編する 64 のキーワード-』紀伊國書店、pp.42-43